

## 1 集団でやり遂げることのすばらしさを実感させる

p 5のグラフからもわかるように、全国・学力学習状況調査の質問紙調査の「ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがありますか」という質問に対して「当てはまる」と回答した児童の割合は、全国との比較において大変低くなっています。

どの学校も様々な活動を位置付け、教職員も情熱を持って指導し、多くの児童が熱心に取り組んでいるにもかかわらず、「(自分たちの力で)最後までやり遂げた」「みんなでがんばったらこんなにすごいことができるんだと感動した」といった実感に結び付いていないというのが実情のように思われます。

そこで、現在取り組んでいる様々な活動を振り返り、児童が集団の一員としての連帯感や達成感を味わえるように改善を加える必要があります。

例えば、以下のような改善が考えられます。

学習発表会等の文化的行事や遠足・集団宿泊的行事あるいは運動会等において、当日の発表等に向けた児童の意欲を尊重し、自主的な活動を十分に認めるとともに、計画や練習、準備の在り方について工夫したり、活動の節目や事後に活動を振り返る場を位置付けたりする。

- ・児童一人一人が行事のねらいを明確につかみ、積極的に活動できるようにする。
- ・体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実させ、発表の成果やそれまでの取組に対して充実感が持てるようにする。



飼育栽培活動、校内や地域社会の美化活動、公共施設等の清掃活動、福祉施設との交流活動等の勤労生産・奉仕的行事において、児童が友達や保護者、地域の人々とともに汗を流し取り組むような体験的な活動を通して、「勤労の尊さ」、「生産の喜び」を体得できるように工夫する。

- ・児童が十分にその活動の教育的意義を理解し、進んで活動できるようにする。
- ・地域の関係諸団体や関係施設と十分に打合せを行い、児童が地域の人々や高齢者と触れ合う中で自分の働きかけに充実感が持てるようにする。



### 【具体的な実践事例】

- 児童が学級のみならずで計画し、協力して練習や準備を進めていく中で生じる様々な課題を乗り越え、成果に結び付けられるような活動を促す
- 地域で行われている奉仕的行事（ボランティア清掃等）に児童も参加し、地域の人々とともに地域貢献するような活動を位置付ける
- 総合的な学習の時間において、課題に協同的に取り組み、成果を地域に発信する活動を充実する

## 実践事例①：遠足で遍路道を歩き、達成感を味わう

遍路道 26 km を歩いた学級があります。

早朝に出発し、みんなで歩きます。行程も半ばを過ぎると、同じしんどさを感じながら目標の達成を目指してがんばる仲間として、次第にお互いが励まし合うようになりました。

夕刻、学校へ。疲れ切った状態で見えた母校の姿は、児童に励ましと安心感をもたらしたようです。そして、ゴール。どの児童の表情も達成感に満ちていました。

この取組が集団の質を高めることにつながり、その後の学校生活にもよい影響を与えています。



## 実践事例②：全校生で、「無言で清掃」を実現する

ある学校では、全校生が黙って一生懸命清掃する「黙目清掃」に取り組み、児童に連帯感や責任感を養い、集団でやり遂げることのすばらしさを実感させています。指導に当たっては、次のような工夫が成果につながっています。

○全教職員が黙目清掃の取組について共通理解し、全教職員がすべての児童を対象に指導する。

○まず清掃の仕方の指導、次に黙ってするための指導、そして教師も黙って清掃をするといった段階的な指導を行う。

○整美委員会が昼の放送で評価したり、児童が自己評価したりする場

○清掃時間だけでなく全校朝会や帰りの会等、多様な場で評価する。

○スモールステップで、児童の少しの伸びをしっかりと認める。

このような指導を通して、児童自身が集団としての成長を自覚し、「黙目清掃」を学校の自慢に思っています。さらには、給食の時間等、他の活動場面でもそのよさが発揮されるようになってきています。



## 効果を上げるためのチェックポイント

### ○ 児童が自ら目標を設定する過程を大切にす

集団で取り組む活動では、教職員の指導が中心となりがちですが、児童にとって「やらされている」という気持ちばかりが高まらないように留意する必要があります。例えば、何かの行事に向けて取り組む際にも、「僕らの力でこんな演技にしたい」「こんな取り組み方をしたい」といった目標の設定を任せるなど、児童の自主性を尊重することが大切です。

### ○ 自分たちで乗り越える経験を大切にす

取り組んでいる過程においても、児童の自主性・自発性を尊重することが大切です。

物事がうまく進まなかったり、失敗したりした場合にも、教職員がすぐに指示を出したり児童に代わって行動したりするのではなく、児童自らが解決し乗り越えていけるようなヒントを与え、粘り強く寄り添いながら指導・援助することが大切です。

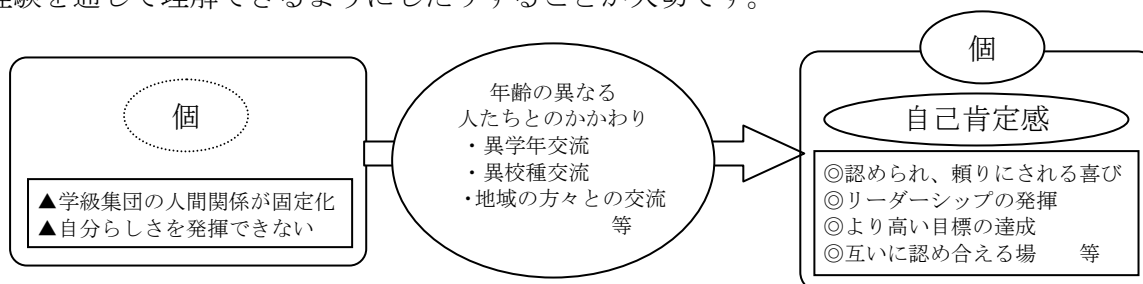
## 2 年齢の異なる人達とかかわるすばらしさを実感させる

自分の働きかけや取組によって、かかわった相手が喜んでくれたり、お互いのつながりが深まり自分を頼りにしてくれるようになってきたりする体験は、人とかかわることのすばらしさを味わわせ、自己肯定感を与えます。学校生活の中で、すべての児童がこのような体験をすることが望まれます。

ところが、日ごろ学級内での活動が多い児童にとって、多様な人々とかかわる機会はそう多くはありません。学校現場からも、「各学年の児童の数が減ってきて、学級集団の人間関係が固定化しやすくなっている。したがって、普段の学校生活では、新たな人間関係を築いたり自己肯定感に結び付く活躍の場を設けたりする機会がなかなか生み出せない。」という声が聞かれます。

こうした現状にあっては、既に多くの学校が取り組んでいるように、学校の教育課程の中に、多様な人々と集団を組んで取り組む活動を組み込む必要があります。

特に、高学年になると自分への自信が大きく低下する児童が多いことが指摘されています。このような児童が、集団の中での役割や責任を果たしたり、リーダーシップを発揮したりする活動を多様に設定するとともに、他者を認めることの大切さを実感できるようにしたり、友達の大切さを経験を通して理解できるようにしたりすることが大切です。



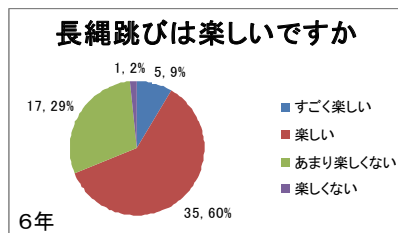
### 【具体的な実践事例】

- 縦割り班（異年齢集団）を編成し、校外学習や縄跳び大会等の行事に取り組む
- 児童会が主体となって集会活動等を行い、共に楽しく触れ合い、交流を図る
- 学年や学級の異なるペアやグループによる活動を位置付ける
- 幼稚園・保育所、中学校、地域の方々と取り組む活動を位置付ける

### 実践事例①：縦割り班で長縄跳びに挑戦する

ある学校では、主に金曜日の朝の活動で長縄跳びを行っています。各学年の児童にとって、「各自に達成感を味わわせやすい」、「話し合いの視点が明確である」、「教師がかかわりやすい」といった利点から、この活動に取り組むようになりました。

取り組む過程で、まだ上手には跳べない1年生のことを考えて上級生が長縄跳び大会のルールについて話し合うなどの姿が見られるようになってきました。児童アンケートの結果を見ても、昨年度に比べて上級生の充実感が高まっています。



## 実践事例②：6年生が低学年の校外学習をサポートする

ある学校では、1・6年生、2・5年生、3・4年生でペアを作り、様々な縦割り活動を行っています。その中の一つに6年生が低学年の校外学習のサポートをする活動があります。

6年生は、事前に活動をプロデュースするとともに、当日は1年生をリードしながら行動します。日ごろ学級では活躍の機会が少ない児童や、問題行動の予兆が見られる児童も、意欲的に低学年の世話に取り組みます。活動後には、達成感を味わい自信を深めた姿が見受けられました。

こうした経験が、望ましい人間関係を形成する力や自尊感情の高まりにつながっています。



安全に注意して、下学年に声をかける



切符の買い方を見守る



ペアになってお弁当を食べる



いっしょに遊ぶ

## 実践事例③：民泊による宿泊体験活動でかかわりを深める

ある学校では、岡山県瀬戸内市の農山漁村における2泊3日の体験活動や民泊家庭との交流を通して、助け合う態度、人の温かさややさしさに対する感謝の心を育てています。

### ○ 農山漁村での体験

- ・地引網体験 ・ウミボタル観察
- ・とれた魚で料理体験 ・いかだづくり

### ○ 民泊家庭との交流

- ・対面式 ・交流イベント
- ・受入家庭の方との田畑や海での作業
- ・郷土の話や夜の島散策（タヌキ観察等）



地引網



アウトドアクッキング



キャベツ植え付け・大根種まき



夕食づくり

初めて出会う人との農作業や民泊は、社会性を試される不安な場です。しかし、人々が温かく迎えてくれたこと、2泊3日の間がんばりきれたこと、そしてそのがんばりを認めてもらったことで、どの子も人とかかわることのすばらしさを実感したようで、お別れに船上から涙を流しながら手を振る姿にもそんな気持ちがあふれていました。

体験前後の質問紙調査（IKR評定）においても「多くの人に好かれている」「人の心の痛みがわかる」の数値が大きく伸びるなど、28項目中20項目でよい変容が確かめられています。

先日は お世話になりました。  
対面したときから やさしく 接してくれて、不安がなくなりました。  
みんなで作った カレーライスやカボチャプリンが、世界で一番おいしかったです。  
キャベツの苗を植えたのは、初めての体験でした。おふろは、いいにおい。入浴ざいで、つかれが全部取れました。郷土の話では、  
いよいよ、「うしろ」の伝説を聞かせてくれました。  
朝のごはんは、温かくて、おふくろの味でした。みなさんのことばで、  
お別れです。ありがとうございました。  
（小学生の手紙）

民泊家庭への御礼の手紙

## 実践事例④：地域・幼稚園・中学校とのかかわりを深める

ある学校では、年齢の異なる人達との交流を右表のように系統的に位置付けて取り組んでいます。

例えば、4年生は、特別養護老人ホームへ行き、お年寄りと交流しています。地域の太鼓演奏を披露したり、一緒にゲームや折り紙をしたりして、喜んでもらっています。敬老の日には敬老会にも参加し、合奏を披露しています。

また、5年生は、田植えや稲刈り、ハマチのエサやりを体験し、できたお米と育ったハマチを使って「新米&出世鍋パーティー」をしています。地域の漁協の「活き活き日曜日」で魚の販売体験もしています。

地域の方々との結び付きを強め、地域への愛着を深めています。

1年生	—	保育所・幼稚園
2年生	—	お店屋さん・老人会
3年生	—	校区内探検
4年生	—	特別養護老人ホーム
5年生	—	農業・漁業関係者
6年生	—	大島青松園・中学校
全校生	—	おやじの会・婦人会 商工会・文化協会



4年生—お年寄りと交流を深める



5年生—お米を栽培し収穫する

## 実践事例⑤：地域の高齢者との交流を通してかかわりを深める

ある学校では、総合的な学習の時間に高齢者の方との交流の一貫として「①運動会で一緒に競技に参加する。②ペタンクを教えてもらう。③昔の遊びをいっしょにする。」といった活動を行っています。以下に、特に心を通わせ、絆を深めることができた事例を紹介します。

### (1) ペタンクの交流を通して

ルールの説明を受けた後、3つのグループ（6～7人）に分かれて、早速ゲームに取り組みました。1ゲーム3～4分間で、13ゲームを行うわずか90分間ほどの交流でしたが、どのグループも始終、笑顔と歓声につつまれていました。その中で、児童が感じたり学んだりしたことは以下のことです。

- ①ルールやわからないことを、やさしくお手本を示しながらおしえてくれたので、とてもわかりやすかった。やさしく話すって大切なんだ。
- ②おじいちゃんたちはペタンクを長い間続けて練習しているので、うまく投げたり的に近づけたりできるんだ。
- ③協力や譲り合いをしたり工夫したりしながら、楽しくペタンクをしている。



児童の感想

### (2) 昔の遊びを一緒にする交流を通して

ペタンクの交流をきっかけに、伝統的なおもちゃを使っていっしょに遊ぶ活動も行いました。手作りの羽子板・けん玉・こま・輪投げ・ビー玉等の活動を通してかかわりを深めました。

- ①できなかつたときに、コツを教えてもらった。おじいさんたちは、いろいろなことをよく知っている。
- ②おじいさんやおばあさんは、うまく玉を乗せたり入れたりしている。教えてもらったようにすると、二つ入れることができた。



こまの回し方を教わる

## 効果を上げるためのチェックポイント

### ○ 事前に、交流活動の目的を明確にしておく

様々な人達との交流活動は、活動することが目的になってしまい、児童の感想も「楽しかったです。またやりたいです。」といったものになりがちです。

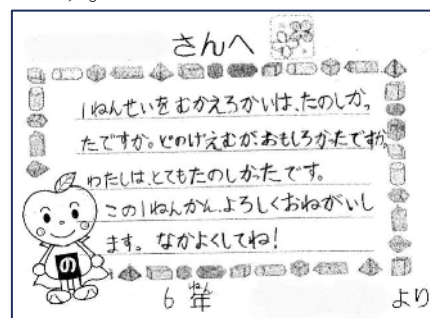
そこで、交流活動の目的を明確にしておくことが大切です。例えば、高齢者の方との交流であれば、「自分たちとどこが違うのだろう。それを見つけたり教えてもらったりしよう。」などが考えられます。そうした目的を持っている児童は、高齢者の方といっしょに活動しながら、話し方や動作、技術等に注目し、高齢者の方のすばらしさを感じ取ることができます。

### ○ 上級生と下級生が自分なりに工夫し主体的にかかわる機会を設ける

学級を超えて行われる集団活動では、児童一人一人への配慮が不十分になりがちです。

「順番がきたら走る」「決められた台詞を言う」などの役割を果たすだけでは、行事は成立しても、人とつながる喜びには至りません。まして、言われたことができず下級生の前で先生から注意を受けた上級生は、自己肯定感を低下させてしまいます。

指導に当たっては、児童との人間的な触れ合いを深め、学級以外の者への排他的な考え方はないか、一人一人が受け身でなく主体的に活動しているか、得意とする能力を生かしているかなどについて留意し、児童一人一人に存在感や自己実現の喜びを味わえる場と機会を与えていくことが大切です。



### ○ 事前の準備や事後の振り返りの場を充実させる

学級活動で取り上げる内容としては、これらの集団活動を活性化するために、例えば、よりよい集団の生活を築くための計画や運営についての話し合い、集団生活のために進んで力を尽くそうとしたり、リーダーシップを発揮しようとしたりするための話し合い、互いのよさや可能性を生かして役割分担をするための話し合い等の活動内容が考えられます。

児童の自発的、自治的な活動を効果的に進めるとともに、異年齢集団による交流のよさを一層重視して計画・運営できるようにすることが大切であり、かかわりの場が形骸化しないように留意する必要があります。

一つの活動の終わりを、次の活動への始まりにするためには、「また、一緒に活動したい」と感じる必要があります。そこで、活動を振り返る際に、プラスの価値付けをします。プラスの感想を持ちにくい場合には、「楽しく過ごせたのはなぜ？」と問うことで、交流の場面を細部に想起させその中から「良かったな」と感じ取らせるようにすることが有効です。



ありがとうメッセージ